

## 大会テクニカルレポート

大会名 JA東京カップ 第29回 東京都5年生サッカー大会

日時 10月7日(土)、8日(日)、9日(月) 会場 稲城市中央公園総合グラウンド・稲城長峰ヴェルディフィールド

東京都少年サッカー連盟 委員長 吉實 雄二  
技術指導部長 井上 雅志  
文責 技術指導部 工藤 正使

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	66	239	3.6

講評 東京都少年サッカー連盟技術指導部が目指す理想の選手育成のために

### ①観て判断する

「判断する」という部分に関してはそれぞれの選手が自分なりの判断をしながらプレーしており、素晴らしいテクニックやプレーが多く見られた。しかし、「ボールが来る前に」あるいは「ボールの移動中に」観ているかという点、まだボールウォッチャーになっている選手が多い。次のプレーの意識についてはチームコンセプトによると思うが、チームコンセプトやプレーの原則を理解しつつより多くの選択肢を持つという意味では、「常に状況を観る」ことの習慣化は課題である。

### ②判断を伴ったテクニックの発揮をする(ファーストタッチの質・プレーの選択)

テクニックに優れた選手が多く足元に止めるようなコントロールは上手だったが、プレッシャーが厳しい状況ではボールを失ってしまったり、ガチャガチャして落ち着かない場面が多い。また、ラン・ウィズ・ザ・ボールのような「動きながら」のボールコントロールについては、フリーであったりプレッシャーが緩い場面でも相手にボールを奪われたり、あるいはラインを割ってしまうような場面が多く見られ、「動きながら」のファーストタッチについては課題である。

### ③攻守に関わり続ける

今大会では1対1やチャレンジ・カバーが徹底されているチームが多く、決勝に上がってくるチームほどプレッシャーが厳しく速かった。そのため、1人の選手の能力だけに頼ってしまったチームは上位に残れなかったように思う。優勝したFC BONOS MEGUROは、例えばFWがドリブルで相手DFラインを突破しようとしてドリブルしても、常にMFやDFがプレーに関わっておりONの選手の選択肢になっていた。また、DFはMFを追い越してオーバーラップする場面も多く見られ、攻守に関わることで得点が生まれていた。

### ④積極的にコミュニケーションできる

決勝トーナメントに残った8チームについては試合の中で選手同士がよくコミュニケーションをとっていた。やはり、コミュニケーションをとりながら自発的にプレーできる選手が多いチームは、チーム戦術も浸透していたように思われる。しかし、まだまだコミュニケーションをとれる選手は少なく、これについては引き続き課題である。

### ⑤リスペクトの心をもてる

「戦う」という意味では素晴らしい闘志を持った選手が多かったが、反面、相手選手や審判に対する不要なクレーム、アピール等も多く、リスペクトに欠けていた場面もあった。

## 総評

テクニックや身体能力の高い選手が多かったため、ゴールを奪う為の仕掛けや崩しがスピーディーであり、反対にシュート等を打たせまいと、身体を張ったスライディングによるシュートブロックなど、力強いプレーも多く見られた。各チーム、前線からプレッシャーを掛けチャレンジとカバーでボールを奪うことを徹底しており、上位のチームほど速く厳しいプレッシャーであったため、個の力のみで頼ってしまうチームはディフェンスを突破することが難しく、攻守において人数を掛けて関わり選択肢を持った中で、状況に応じたプレーができるチームが上位に残れたように思う。